

の重労働を強いられ、食料事情の悪さから次々と仲間たちが倒れていき、六万人余りの尊い命が消えていった。

「私は幸いにも三年三カ月後、無事に復員できました。これも剣道で鍛えた精神と体のおかげだと思っています。」

終戦後は、県内の各剣道連盟の発足に奔走する一方、様々な剣道大会で優勝に輝いた。また、文武両道にも心がけ、衛生管理者や文部省検定試験・高等学校教諭体育科剣道に合格したほか、地域社会での貢献活動などが認められ、数々の感謝状を受けた。

昭和六十一年と六十三年には、日台湾交流親善剣道使節団員に指名され、台中、台北でけいこ会や親善試合に参加し、国際交流にも一役買った。さらに、昭和天皇御践祚五十年、御喜寿、御在位六十年奉祝武道大会に、指名を受けて模範試合と審判を行った。

今後は将来の剣道を担う後継者を育成し、地域のリーダーとして地域社会に貢献したいという。

（栃木県 野沢 芳夫）

抑留記

栃木県 野沢 芳夫

「ヤポンスキーダモイ、ビストラー、ビストラ」ソ連兵の言葉を信じ貨車で運ばれた先は、何と地獄のような酷寒の地だった。昭和二十（一九四五）年八月のソ連の対日参戦に遭遇し、敗戦後捕虜としてシベリアで抑留生活を送った。その過酷な体験を、当時の記憶を頼りに記したものである。

少年の凶悪犯罪などが多発する今こそ、命の重みや人が助け合う心を考えてほしい。

昭和二十年八月、ソ連軍侵攻による出動下令のあったのは八日の深夜、正確には八月九日午前一時過ぎ、小雨の降る夜であった。完全武装で校庭から一文字山へ、肉攻班の配置のため陣地構築、東京城、鏡泊湖へと、めまぐるしい作戦行動は生死を超越した当時の我々の姿であった。峭壺に入り、敵戦車に黄色火薬を

背負い、または爆薬を抱いて次々と戦車に飛び込む。爆煙と共に二十歳の命が消えていった。

非常呼集

いよいよ来るべき時が来た。直ちに非常体制が敷かれ、慌ただしさと興奮の中、関東軍司令部から、前線に出動して敵を迫撃せよとの勇壮果敢な出撃命令が出た。途中、在留邦人の「兵隊さん頼みます、頼みます」の涙を流した哀願に全員悲壮な決意と責任の重さを感じ、ソ連軍への敵愾心を強めたものであった。

かつて国策に基づき旧満ソ国境に近い辺境の地で開拓団として食糧増産に励み、太平洋戦争の末期の戦雲急を告げる頃、青壮年男子のすべては軍に召集、ソ連軍の侵攻により開拓団の老幼婦女子を主とする一般邦人達は阿修羅の混乱に陥り、牡丹江、寧安、東京城、敦化等で終戦時肉親と離別した。この悲惨な状況を目のあたりにした。

我々は牡丹江市郊外に出陣し、掖河、磨刀石でソ連機甲部隊を迎撃、壮絶なる死闘を繰り返した。多くの犠牲者を出してソ連軍の牡丹江方面への侵攻を一時的

にせよ阻止したことにより、時を稼ぎ在留邦人を助けることができたことは誇りとするところである。

終戦

日本は負けたのか、そんなはずはない、我々は自分の耳をいったんは疑った。玉砕を誓い合った日本男子、誰の顔にも涙があふれ号泣した。魂を奪われ泣きに泣いた。

夕方近くソ連軍の戦車やソ連兵を満載したトラックがフラァー、フラァーと勝鬨かつどろも高らかに進駐して来たのである。

収容所

出入口以外は有刺鉄線が二重に張り巡らされ、四隅には望楼が立ち昼夜監視兵が見張っている。ある時には望楼の監視兵に撃たれ死亡した兵もいた。

ソ連兵が特に欲しがっていたものは時計と万年筆であった。日本兵は誰もが持っていたものであるから。

この脅迫に遭い、時計や万年筆はもちろん、その他目ぼしいものと思われるものは全部略奪されていた。護衛兵としてのソ連兵の腕には五個も六個も腕時計が巻

かれていたので誠に滑稽さをも感じた。ソ連兵は得意然とした態度でダバイ、ダバイと日本兵の尻を叩くのであった。帰国への希望を失い、どこまでも歩かされて屠殺場の露と消えるかもしれないという絶望と恐怖におののきながら歩む兵の足取りは実に重かった。

帰国への希望を失い、絶望と恐怖におののきながら酷寒三十五度で夏服姿の日本人に、十一月の寒さは体の芯まで凍てつくように感じられた。連日の貨車輸送のため、疲労、特に空腹の毎日であった。そして着いたところは雪の上、多分、ホルモリンかと思われる。

そして、誰もが住んだこともない、道路に人の足跡さえないとところを叱咤の声と銃であやつられながら、ぶらりぶらりと他人の足を借りているような哀れな行軍であった。

そして第七分所、誰もいない森の中で伐採、そして薪づくり、天幕張りの毎日であった。ここで生活するのだと言われ、皆一生懸命であった。さてでき上がり、一泊して夜が明けると隣の戦友であった者が呼吸もなく冷たくなっていった。以後のことは不明である。

後続の部隊が入所して来た。そのため我々はまたどこに行くともなしに奥へと出発したのである。二二二分所、二五五分所、二〇一分所、二五四分所、二一七分所、二一六分所、二二六分所とたらい回しの生活であった。分所は若干前後しているかもしれない。

一番長かったのはホルモリン地区第二支部であった。あたりを見回しても、あるのは五葉の松、白樺の木、特に松が多かった。先ずは伐採作業。長さ五・五メートル、切りロー〇センチ前後を見つけて道路に並べる。雪解けと共に地盤が下がるため、あたりは湿地のためである。並べた上に砂利を敷き、更に並べた上に砂利を自動車にて落とす。そして地盤ができると線路を敷き、貨車で砂利を運び、貨車より線路の脇に崩れ落ちるバラスの音。降ろしても降ろしてもなかなか減らない。かつて重戦車を運んだという貨車の大きいこと、いつ終わるだろうか。カラカラ鳴るシヨベルの音が空きつ腹に響く。いつの間にか東の空が白み、作業が終わりに近いことを知る。

また、大きい白樺や松を切り出しては製材所で枕木

を作り、鉄道建設と製材所で昼夜の区別なく働いた。

これが第二バム鉄道とは誰も知る由もなかった。

いつまで続くのだろうと思う。皆話す気力もなく、赤く燃える火をうつろな目で見ている。

食事はパン三〇〇グラムとスープのみである。疲労のため戦友が死亡することは毎日のようであった。

シベリアの寒さは例外である、春と秋はほとんどないから夏から一足跳びに冬が来る。木の葉が落ちるところか、木に付いたまま凍っている。六月上旬頃になると雪や氷が解け、木や草の芽が出始める頃、木の葉が落ちてくる。いかに寒いかを感じられると思う。この頃森の中は雪と氷が解け、川となり流れるのである。鱒が山で捕れるのもこの頃である。野草は芽を出してたちまちに葉が出て花開き実となる、この時期が一番楽しい。白樺の木に傷をつけては下に飯盒を置いて、木から出る紫色の甘い水が飲めるのである。また五葉の松を枕木にするため倒すと拳大の実が付いている。この実を焼いてヤニをとり水に浸けると、ちょうど落花生のような味の実が食べられる。山の中を

歩くと、キノコ、草の芽、山イチゴなど食糧が豊富で、毎日茹で野菜が食べられる。だが決して安心はできない、毒草などもあるからだ。

山には野生の葉の丸い煙草が所々に生えている。その葉を持ち帰りストープの上で乾燥させて吸うことができる。

但し煙草の葉を探すことのできるのは伐採班の特権だと思ふ。切り出す木を見つかるふりをして探して歩けるからだ。だが気をつけないと、ダニが体に付き皮膚から食い込んでなかなか取れないし、一度食いつくと体内まで入ると聞いた。また蝮の多いのには驚いた。太い倒木の日の当たる所には鎌首を上げて日向ぼっこをしている、胴回りが太い割に短い体。あまり人間を見ないためか、おとなしいように思った。

宿舎に戻ると今度は南京虫に悩まされる。夜中にカサカサやって来る大きい奴がシャツの縫い目にいっぱいにしがみついている。誰もが裸になり、押しつぶすどころかストープの煙突に当てて擦ると、ピシリという音がしてシャツの縫い目が赤い自分の血で染まっ

いる。

冬の朝は粉雪のため庭が真っ白である。その上に毛布を並べておくと雪が舞うため白くなる。太陽が出て曇りの日でも一日中粉雪が降っている。だが粉雪のため日本のように積雪することがない。しかし窪地や風の陰になる所は雪が深くなる。川などは窪みがないから道路となり、自動車が行くのに都合がよい。

話は戻るが、夕方作業から帰ると、朝広げた毛布が雪の中に冷たくなっている。雪を落としその毛布にくるまると雪が湿気を吸収してくれるので暖かく感じられ、日本では考えられない。

夜のベーチカ当番は三級オーカーと呼ばれる栄養失調者の使役である。使役に出なければ食糧は減量されるので、食べ物欲しさに無理しても出なくてはならない。減量された食糧は全部看護兵の胃袋の中に入り、オーカーは普通食よりも少量しか与えられないため体力の回復が遅れ、そのうえ作業に酷使されるため毎日死亡者が続出したのである。

ノルマを達成させるためソ連当局はいろいろな手段

を講じたが、最も効果があったのは、食糧を餌にしノルマと給食量を直結させたことである。

ノルマ達成率一六〇%以上とか四階級に分けられ、それぞれ一〇〇グラムの差をつけられる。その他雑穀のスープにはもっとひどい差をつけた。ハラシヨラポーターとニハラシヨラポーターではそれぞれ前に述べた差別により給与され、ノルマが達成できないと減食されますます衰弱していくよりほかなかった。また意識的に怠けているとみなされた者は、大衆の前で「吊るし上げ」のうえ営倉に入れられる者もあった。疲労困憊して帰營する我々の唯一の楽しみは夕食以外には何もない。

ある日、鉄道建設の監督に、独ソ戦に敗れて捕虜になったとか、我々と同じ環境にあった者であり、あまりソ連国のことを良く言わない将校が来た。休憩のときなどに物入れから大きな手で煙草をくれるので好感が持てると思った。昼休みには線路を枕に寝ることができた。他の監督ではできない光景であった。

製材工場、特に枕木を作る材料となる唐松や白樺の

木の中でも一メートル以上の太さのものを見つけて、二メートルの二人用鋸を引いたり押ししたりして使うのである。作業には総てノルマが課されるのである。二人一組で立ち木を切り倒し、枝払い、玉切りにして積み重ね、三立方メートルになればノルマ完了である。しかし飢えと寒さと労働に追い回され奴隷扱い、栄養失調の我々には重労働であり、なかなか達成できるものではない。そこで考えたのが、既に検査済みの丸太を運んできて今日の積み上げた中に混ぜ込んだり、周りの見える部分には立派な材木を使い中身はうつろにするなど、あらゆる工作をしてごまかすことに努力したのである。この芸当を知るや知らずや、監督の名前は「ゾッコーフ」と言ったかと思うが、またこれが親日家であるため助かったのである。早くこの労働から逃れ祖国に帰還させるためにもノルマごまかしもやむを得ないことだった。

それでも作業途中に倒れたり、夕食のときは元気だった者が朝起きると冷たくなり返事も無い。飢えと寒さ、重労働に悩まされシベリアに入ったが、この伐

採をやったときが一番死亡者が多かったのではないか。

この監督について、大阪出身の川崎修三通訳が私の所に来て、君のことを大分好いているようだと言ってきた。だから君は残されるかもしれないと伝えに来た。冗談ではないと思った、何で今まで帰国するため要領よく過ごしたか考えた。

その晩のことである。監督が大きな包みを持ってやってきて、「タワリシューンケル、クーシ、クーシ」と言っていた。これは川崎通訳の言ったことが本当になったかなと思ったが、包みを開けてビックリした。何と四キロの黒パンである。我々労働者が食べる量の十二、三人分である。せっかくだから通訳のことは忘れて頂くことにした。わが班の者達に少し分けた。何しろ空腹だったのでまだ食べたそうだったが半分残した。そしてその晩はパンを枕に寝ることにした。なかなか心配で眠れなかったが、疲れのためにいつしか寝てしまった。

朝起きると確かに周りが硬かったため枕は残った

が、中身はすっかり空になっているので大騒ぎになったが、後の祭りで誰が食べたか判らなかつた。

復員後、岡山か広島か定かでないが慰霊祭のときだった。駅を降り集合所に歩いて行くと誰か後ろから肩を叩く者がいた。野沢君だねと言われたが、私としては誰か分らず半信半疑でいたら、「北海道のAです」と言つて話をしてるうちに分かつて来た。三十五年位前に話し合った二人で、よく故郷の名物のことで空腹を我慢した者だった。その者が突然言いだした、俺は栄養失調のとき君に助けられたと。何のことやら分からなかつた。実はあのパンを盗んで食べたのは私です、パンのおかげで生きて帰ることができましたと。

私としては、あの時言われたらどうなつたかは分らなかつたらう、今さら助けましたとは言えません、良かった良かった、体だけは気をつけろよで一件落着である。それから毎年秋季になると名物のやり取り連続の今日この頃である。

健康診断は、ソ連の軍医によって行なわれ、この診

断の結果により作業が区分される。一級者は重労働で伐採または土木工事、二級者は一級者に準じた作業、三級者は軽作業で、伐採の片付けや枝の焼却や収容所内の作業、四級者は冬などはストーブ当番で、夜中、薪にて一晚中火を絶やすことなく努めなければならぬ。ストーブはドラム缶を横にして、絶えず真つ赤にしなければ三段ベットの下の者は寒くて寝ることができない、上の者は逆に熱くて寝られない。そのうえ南京虫の攻撃を受けなければならぬ。三段の下は凍りついている有様である。

また、ソ連の軍医は他の病気より発熱者を重視する傾向があり、熱がなければ病気と言わない。聴診器などは使わない。体温計のみ渡されるので、熱がなければ病気ではなく、ただ仕事をさぼるのだと言うのである。日本人はソ連人より頭がよいので、渡された体温計を布で擦り目盛りを上げることに成功した。そして熱があれば四級になり作業が免除される。

健康診断は全裸になり後向きにしてお尻の皮をつまみ、肉づきの具合で弾力性を見るため、診断は約十

秒位で終わる。神経痛やリウマチという病気はない。いくら痛くても熱が三十八度以上なければ作業免除にはならない。日本人には考えられないことである。医者には事前の健康指導、診断により地域住民を病気にさせない努力が強制され、患者が多く出るとは医師としての資格が問われることになり、患者が少ないことが評価されていた。

朝夕の点呼、シベリアの夜明けは遅かった。外は暗くて、ただ雪だけが白い。作業整列、午前七時、営門前に五列縦隊に整列してもまだ朝日は昇らず、ソ連の護衛兵の人数調べが終わるまで我々は足踏みしながら寒さと闘った。護衛兵の人員報告は時には三十分と長くかかったこともあった。それでも喋る者がいなかった。ただ丸腰にぶら下げた飯盒や缶詰の空き缶の音だけが足踏みの音と共にガチャガチャ音を出すだけだった。銃を捨てた我々にとっては、飯盒や水筒、箸やスプーンは命とともに一番大切なものであった。そしてひげは伸び放題、ひげの先に吐く息の露がたまり、玉のようになって歩く度に段々と長くなり、つづ

らのようになる。急に取ろうとすればまつげやひげまで抜けるようで痛くてたまらない。火に近づけて溶かす以外はない。

朝の食事は六時、腹が減っては寝てもいられず、我先にと食欲を満たす胃袋の喜びに零下三十五度の酷寒に耐え忍びながら待つ日本兵である。黒パン三五〇グラム、他雑穀のスープが渡される。パンは朝昼の二食分であり、誰もが空腹を我慢しきれず、朝食と一緒に食べてしまう者が多かった。それは大事にとっておいても盗まれてしまう心配があるからである。

服装については、戸外の寒さが次第に厳しくなり夏服だけでは外に出ることができなくなった頃、綿入れの防寒服、大きなフェルトの長靴、それに日本製の防寒帽が支給され、外に出ても寒さが幾らか緩和されたが、歩くのに困った。全く靴が歩いているようだ。そのうえ大きな二人用の鋸、タポール、ツルハシ、シャベルなどが届けられ、いよいよソ連の強制労働の本領が発揮され出したのである。

気候も春と秋がないため八月下旬には雪が降り始め

る。六月頃には雪や氷が消え冬から夏になり、一年を通じて猛暑と厳寒の繰り返しで、ダニと蚊、南京虫、そのうえ洋服などは四年間で一度も洗濯をしたことがない。ただノミの巢だけ一年に一回か二回高温滅菌をするが、効くかどうかは分からない。

入浴は、水を川から切り出して桶で運び、風呂場で溶かして湯にするから大変な重労働である。一人約三リットル位の湯で洗うだけで、湯船に入るようなものではない。日本人には物足りないもので、ゆっくりでない。

食事については、先に述べたパンとスープ以外に、年に一度の粥が出るのはメーデーだけ、あとは夕食に高粱とかヒエの粥が茶飲み茶碗に半分程度。時には鯨が出るときもあるが、これがまたピア樽に鯨を塩で漬けたもので、焼くと肉と骨とに分かれ火の中に落ちてしまう。ソ連人は生のままで食べるとのことだが我々には塩辛くて、しかも腸と頭がドロドロして何として食べられなかった。鮓フナも同様で、恐らく何年か前の保存食ではないかと思う。

野菜などはなかったの、柳の葉や雑草の芽、ビタミンCの補給には白樺の木から出る水や、パンの屑を発酵させその中に松葉を入れ、それを飲むと元気が出る感じであった。

茸キノコは毒茸を除きほとんど食べ、特に鍋茸などは飯盒に入れて水炊きすると底には白い虫がいっぱい沈んでいたが、これもビタミンだと思っておいしく食べることができた。

家屋を冬期に建築したことがあった。まず穴掘りで、凍結しているのでなかなか掘ることができない。

ノルマがあるので監督の間を見ては穴のなかに柱を立て水か小便をかけると一本立ち上がる、周りには雪をかけてでき上がり。それを何回か繰り返すうちに柱が立つ。柱に溝をつけて壁の代わりに丸太を並べて出入口を除き全部並べる。窓などはない。天井も同じ。隙間には苔を詰めて塞ぐ。屋根などはない。ほとんど雨がないからだ。あるとしても簡単な勾配で、松の木を一尺ぐらいの丸太に輪切りにして縦に割って薄く削り、それを針金の釘で打ち付ける程度で、丸太の周り

に馬の踏みわらや馬糞を積み暖を取るようにする。中にペーチカを置き煙突を作り、三段または二段の床を作りでき上がり。何しろ鋸と鉋で作る家なので責任は持てない。夏になる前に移動したいと祈るばかりであった。

民主運動

ソ連当局の権力を背景にアクチーブたちは反軍闘争として軍隊組織の解体、そして将校、下士官、兵の全部の階級章を取り外され、軍隊の上下の関係がなくなった。全員が平等にされ、新しい収容所の空気に変わった。委員会、各作業隊長も所内の選挙で選ばれるようになったのもこの時からであった。そして元軍隊の参謀、情報隊、特務機関、警察、憲兵、司法関係者等の反動者の摘発のため、日本人の中にもスパイ網が作られ、親しい者でも心を許して真実も話せない、と、陰險な空気が漂っていたものだった。昨日まで親しかった同志が一食のパンで買収され親しい友の前職歴を密告し、暴露された事実によって再三吊るし上げが行われた。

吊るし上げの方法は、オルグの吊るし上げの理由説明に始まり、円座している周りの人々から野次と罵声が乱れ飛び、その被告の反動ぶりをなじるのである。円座の中央に立たされた被告は、数十人の視線と悪口雑言を一身に浴びながら一言も反発することもできない。オルグの罪状暴露の熱弁に一般大衆は、同感、異議なし、民主主義の敵だ、使い殺してしまえと怒号し続ける。気の弱い者は発狂状態にまで突き落とされるのである。しかしかつての日本軍隊のように殴る蹴るといった暴力行為が行われなかったのが幸いであったが、精神的な圧迫は甚だしいものがあったのだ。もしも被告に対し同情的視線を送り発言でもするならば、被告同様反動分子として中央に引き出され、吊るし上げられるからたまったものではない。いやでも自己反省と誓いの言葉を述べさせられ、オルグの閉会の辞と、インターナショナルの歌をうたって、本日は有意義な闘争を展開し偉大なる成果を勝ち取った、として吊るし上げが終了するのであった。

この非合理的な人民裁判が月に数回も行われ、その

ため無関心であった者も、反動分子のレッテルを貼られる恐ろしさのために、昼間の重労働で疲れ果てた体に鞭うって日本新聞の輪読会に集まったのである。そしてまた作業現場の僅かな休憩時間にも輪読会が催されたのであった。日本新聞には食料難、戦災の状況、闇市、浮浪児、日本資産家の搾取、日本軍捕虜の引き揚げ状況、共産主義政策の謳歌、等々であり、この指導者となったアクチーブの大半は労働階級の出身者であった。そして民主化運動が盛んになってくると、日本への帰還は民主運動の実践の程度如何によってその順位が決定されるということになったのである。吊るし上げの怒号の中にも、反動は日本に帰すとか、白樺の肥やしにしろとかいいう言葉が入って来るようになってきた。そしてノルマ遂行者の名前が出され、ますます日本人捕虜の労働は強化されていった。平塚運動とか既に祈る事件とかの非人道的な作業事件が起きたのも、その責任者がソ連当局の強要から逃れるために作業を強化した結果生まれた事件であった。

捕虜の最大の希望と願いは、一日も早く祖国日本に

帰ることである。ダモイ、ダモイの噂で持ちきりになった。作業現場においてもソ連の警備兵達までがスコラダモイを口にするのが多くなってきた。またダモイのデマが飛び出したかと我々は半信半疑の気持ちであったが、それでもダモイの話を聞くことは最高の喜びであった。しかしいつかは帰国できるだろう。

帰国の声が出たために隊員も元気が出てきた。作業にも慣れてきたし、以前よりはノルマの完遂もたやすくできるようになってきた。体力のない者は既に死亡してしまっていたし、また運のよい病弱者は帰国してしまっていたので壮健な体力の保持者ばかりになっていたせいもある。

トイレについて

二重、三重の有刺鉄線に囲まれた収容所の北の端に便所を作った。深くて細長く相当大きい便所である。

朝のラッシュ時にはお尻丸出しの兵隊がちょうど電線に止まったツバメの行列のように並んだ。とにかく約一千人に近い人間が一斉にする生理現象の調整場である、たちまちにしていっぱいになるのがわかる。

冬場は各班順番に便所掃除に当たる。何しろ酷寒零下四十度のシベリアである。毎日の排便で日本アルプスを思わせるような突起した山もできる。自営自活の作業であるから、臭いは覚悟のうえと作業に取りかかる。まずは黄金の山脈をツルハシで崩し始める。時々手心を加えながら上手に作業をしているのだが、小粒の金塊が口や耳に飛び込んでくる。次に、崩した汚物をシャベルで橋に積み遠く離れた窪地に運ぶ。二十人の人数で半日は十分かかる作業量であった。作業後は衣服を脱ぎよく叩いて着直すのであるが、暖房の利いた部屋に入ると何とも糞臭が二三日は取れず全く困ったものであった。しかし生きて祖国に帰る希望実現のためには、全捕虜の奉仕のためにも、不服不満をもらす者は誰もなかった。

帰国

思えば、日本軍の捕虜としてソ連国に移送されたといった日本兵は、いつシベリアの広野で銃殺されるのか分からない不安と恐怖に長い間脅かされていたのである。ダモイは解放される思いで嬉しかったが、全員

帰国できるか不安であった。それにいつも騙されているから安心できない。冬は港が凍って船が入港できないとか、ソ連当局から日本政府に輸送船を要請しても日本政府が誠意がないので輸送船がナホトカに入港しないとか、本心が分からない。

昭和二十四年十一月下旬、何の連絡もなく、ある日突然、私物を持って広場に集合するよう命令された。次の瞬間頭に響いたことは、また他の収容所に移動するのかと思つたら、ダモイ、ダモイの声であった。だが列車に乗るまでは安心できない。駅もない、ホームもないが、連結された貨車があり乗ることができた。列車は走り、幾つかの収容所を眺めながら過ぎて行く。途中には皆帰国した後と思われる建物が、特注の水や小便で固めた雪の上のため氷が溶けると自然に傾くのは仕方ないと思った。それにしても我々が奥の地区から帰るので一番早いと思つたら一番遅かったのである。今度は帰る嬉しさと故郷の心配であるが、みんなの顔は段々と明るさや気迫が感じられるようになってきた。そして疲労と空腹のためいつしか深い眠りに

入っていた。恐らく帰国したら腹いっぱい食べたと思っ
思っていることだろう。

やがて幾日かたち、海の見える丘の上にある収容所で待機することになり、相も変わらず命をつなぐだけの少量のパンとスープの夕食の後、寝台上がり久しぶりに長々と手足を伸ばし望郷の想いに浸っていた。やがてナホトカの空は晴れ晴れとしていた。

朝食を済まし一人一人舎外に呼び出され服装検査、私物検査をされ、書いた物は一切没収されてしまった。ソ連に不利になるものは服装検査で全部奪われてしまい、いまだに残念でならない。誰もがただ黙ってソ連兵のなすがままの指示に従わざるを得ない。船に乗り込むまでは、そして乗り込んで出港するまでは安心できないからである。乗船してからも、何らかの理由で下船させられることがあるかもしれないからである。誰もが、どうしても帰らなければならぬ、どうしてもこの帰還船信濃丸に乗らなければならぬ、全員が帰国を目前にしている喜びと、乗船させられなかったら大変だという不安が、体中を交錯し、黙々とし

てソ連兵の命令に従っていなければならぬ。

目の前に見る三千トンの信濃丸はいささか大きい。見上げると人間が小さく見える。一千人一大隊を乗せた信濃丸は、ひっそりと静まり返っていた。乗船はしたものの、まだ一抹の不安が残っていた。それはまだ船にソ連の将校が数人乗船しているからである。いつ下船させられるか分からない危険があるからである。それからしばらくたって将校が繩梯子を降りていく姿が見えた。船の小窓から見ると日本海は島一つ見えない紺碧な広い海だった。機関の音と共にドッと歓声が上がった。俺達はずいに帰れる、皆それぞれに抱き合っ
て喜びに泣いた。

船中食は赤飯に里芋の煮付けが出たと思う。夢にまで見た赤飯、皆夢中で食べた。

次第に日本海の冬の波は荒くなった。甲板にまで波が打ち寄せる。まるで船と波が戦っているようだ。船中ではおいしく頂いた食事をお返ししているようだった。通路トイレは汚泥と化していた。次第に船中から甲板に集まるようになった、臭気より逃れるためであ

る。

やがて遠く一抹の明かりが東の方向に映り始めた。

だが、なかなか近づかない。次第に明かりが点々と多くなってきた。東の空が明るくなり山々が見え出した。誰からともなくインターナショナルの合唱が響き出したが、いつの間にか消えるように静かになった。

日本が近づくことにより、多年の辱めにも耐え忍んできたのは祖国日本に帰るがためである。人間は経験した事柄は必ず再現する本質を持つものであるため、今までの生活の中で経験した行動を再現したくなかったからである。従って沈黙作戦に出れば、お迎えに来た帰還船信濃丸の皆々様方はじめ引揚援護局の方々に迷惑を少しでもかけぬようにということであった。敗戦となった祖国日本を復興させようとする愛国心に燃えて帰還したもので、生活はどうだったかと聞かれるなら、郷に入っては郷に従えでなければ生き長らえることはできなかつた。反動的行動は死の道に一步一步近づいただけである。

夜明けと共に、夢にまで忘れることのなかつた祖国

舞鶴湾の山々が見え出したとき、引揚者達は甲板に駆け上がりデッキの手すりに身を乗り出して、昨日の荒波などや疲労のことなどいっし忘れ、俺は日本に帰ってきたんだ、帰って来たんだと滂沱なる涙を顔一面に流しながら小躍りして喜ぶ者が多かった。

舞鶴港内に船が近づくに従って、親兄弟、肉親達の出迎えの幟のぼりが目映る。誰しも目頭が熱くなっていたが、引揚者一同は沈黙戦術の意義をよく納得して、正々堂々と棧橋を渡り、祖国の土に第一歩を踏み出したのである。

私達は舞鶴港の引揚寮に入り、身体、衣服、私物の消毒、予防注射等一切の復員業務が終了した後で、帰郷旅費として千円支給された。戦前の貨幣価値しか頭がない。今浦島気分で、実家に帰りどうして使うかと大いに喜んだものだ。家の新築でもするかと考えていた。

まず第一に帰国報告のため実家に打電した。引揚列車に乗り込んだ。すると地元の婦人会と思われる人たちからサツマイモのふかしたものを一切れずつ差入れ

があった。これがまた、うまいの何の、言葉にならないほどおいしかった。このことは今でも忘れることができない。本当に地元の皆さんには感謝でいっぱいです。後で考えてみるに、物価の高いことにはびっくりした。眼鏡の修理、万年筆、煎餅一袋で、支給された家を新築できると思つた金はすつてんでんだつた。大阪駅に到着、そこには伯父が連絡もないのにリンゴ一箱を持って待っていた。周りの人達に一個ずつ分配した。自分も一個食べ、あとは椅子の下に置き、明日食べようと思つているうちにいつの間にか寝てしまつた。明け方になりいざ食べようと思つて探したが一個も残つていなかった、誰かの腹に収まつたのであろう。残念であつたが仕方ないとあきらめた。

やがて関東、東北方面の引揚専用列車は無事東京駅に到着した。ホームには旗や引揚者の氏名を書いた幟を押し立てながら出迎えに來た家族や友人知人、赤旗の混雑する中に大勢の引揚者は吸い込まれていった。三十分位停車しただらうか、専用列車は再び出発した。

小山駅に到着した。東京駅同様に、出迎えの歓迎の人々でごつた返していた。引揚者達は懐かしい家族や友人に囲まれ、抱き合い涙を流しながら喜び合う光景が広場のここかしこに展開されていた。待ちに待つた何年かぶりであつた肉親の愛の深さと生ける喜びの極限に接した美しい娑婆の姿を見て、心の底から人間味を味わつたものであつた。

帰国して六カ月位はシベリア呆けで、無我夢中の生活が続いて仕事に就くことができなかった。消防団に入団して本部長になりやつと生活に慣れてきたが、胃痛に悩まされ結局切開手術を済ませ、経過が順調に回復したため会社勤めができるようになってきた。その後は地域の公職に奉仕するようになった。

戦後五十有余年、戦争を放棄した日本は、一億国民の献身的な努力によって平和のうちに経済大国として世界の脚光を浴びるようになってきた。戦前、戦中、終戦直後には考えられないほどに物資が豊富になり、今の若い人々はもちろん、この平和が至極当然なりと思ひ込み自由自己の権利のみを主張して、思いやりと

か感謝、奉仕の精神を忘れてしまった感じがしないでもない。

悪夢のような戦争など思い出すのも嫌だという人も
いるだろう。また軍歴者の方々も若い人に遠慮して戦
争のことは口にしなくなっている。しかしながらシベ
リアの酷寒地で捕虜として酷使され、また人類初の原
爆の洗礼を受け数々の悲惨な体験を積んだ我々にとつ
て、戦争は忘れることのできないものである。再び戦
争に巻き込まれてはならないという日本国民の切なる
願いが今日のこの平和な日本を築き上げてきたもので
ある。

我々の父が、夫が、兄が、そして戦友が祖国の不滅
を信じつつ戦場に散り、幾多の尊い犠牲者を出したこ
とを無意味にしてはならない。

今や全国抑留者協会の下に、抑留者がいまだ帰らぬ
戦友を慰めるため凍土の土と化した地に交互に墓参団
を結成してお参りに行っていることを忘れてはならな
い。

終わりに臨み、我々は異境の地に倒れた幾多の霊に

弔意を表すとともに、世界平和の願い、戦争を永久に
放棄する日本国民の悲願を込めて、長く後世に伝えん
とするものである。

【執筆者の紹介】

生年月日

大正十三年四月十日

家族構成

父母 兄弟（男四人 女四人）

八人の長男

昭和六年四月

村立絹尋常高等小学校尋常科入

学

昭和十四年三月

同右高等科卒業

四月

茨城県立結城農業学校入学

昭和十六年十二月

同右繰り上げ卒業

昭和十七年四月

東京府北多摩郡小平村 陸軍経

理学校勤務

昭和十九年九月

宇都宮東部三六部隊入隊

十月

河北省涿縣チウオンセン（北京の南々西五

十キロ）第六三師団七六旅団独

立歩兵第二五大隊 通称陣第四

昭和二十年二月

二八六部隊
幹部候補生

八月

ソ連軍侵攻による戦闘に参加

十一月

ソ連コムソモリスク地区 ホル

モリン地区

昭和二十四年十二月

ナホトカ経由舞鶴港入港 復員

復員後

消防団 農協理事各委員長 区

長 神社総代 寺院檀徒総代

全抑協県連副会長 同中央評議員

(栃木県 黒川 護)

シベリア抑留体験記

千葉県 鈴木 甲子幸

先般「異国の丘」という一文が広報『ひかり』の「町長ひとりごと」欄に掲載されていた。町長さんがシベリア抑留について深い関心を寄せられていること

に敬意を表しながら読ませてもらった。そこで、シベリア抑留者の一人として、抑留生活の一端を紹介し、戦争についてこの面からも考えてもらえたら幸いである。

終戦、そして牡丹江へ

中国の東北部、旧満州ハルビンで終戦を迎えた私は、武装解除を受け牡丹江に集結を命ぜられた。出発時、できるだけ多くの物資を馬車に積みこみ出発したものの、道中の悪路に悩まされ、結局、必要最少限、身につける範囲の物だけとなった。

ソ連軍との戦闘の生々しい痕跡が各所に残っていた。巻脚絆を巻いたまま、片足がむき出しに見える日本軍兵士の死体、悪臭が漂う中をひたすらに歩き続けた記憶が鮮明によみがえってくる。戦闘部隊は、汚れた軍衣をまとい、傷ついた戦友を担架に乗せて同行している。苦しうに顔をゆがめた兵士の顔が今でも目に浮かぶ。敗戦の無残さ、無念さを異国の山野で、いやというほど見せつけられた。